

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載
 【部門区分】第 1 部門第 2 区分
 【発行日】令和 3 年 4 月 8 日 (2021.4.8)

【公開番号】特開 2019-154869 (P2019-154869A)
 【公開日】令和 1 年 9 月 19 日 (2019.9.19)
 【年通号数】公開・登録公報 2019-038
 【出願番号】特願 2018-47118 (P2018-47118)
 【国際特許分類】

A 6 1 F 13/511 (2006.01)

A 6 1 F 13/514 (2006.01)

【F I】

A 6 1 F 13/511 3 0 0

A 6 1 F 13/514 1 0 0

A 6 1 F 13/514 3 2 1

A 6 1 F 13/514 2 1 0

【手続補正書】

【提出日】令和 3 年 2 月 25 日 (2021.2.25)

【手続補正 1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 0 8

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 0 0 8】

本発明に係る吸収性物品は、前記内外面側シートの中の少なくとも一方が柔軟性不織布で形成されており、前記柔軟性不織布は、繊維径が 14～22 μm のポリエチレン繊維から主として構成されており、KES 法による摩擦係数の変動係数 MMD/MIU*100 (%) が 2～6 % である。

【手続補正 2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 1 5

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 0 1 5】

【図 1】本発明に係る吸収性物品の実施形態の一例における使い捨ておむつの斜視図。

【図 2】使い捨ておむつを内面側から見た、各弾性体の最大伸長時（弾性材料の収縮作用によるギャザーがなくなる程度）まで縦方向及び横方向に伸展したおむつの一部破断展開平面図。

【図 3】使い捨ておむつの分解斜視図。

【手続補正 3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 1 6

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 0 1 6】

下記の実施の形態は、本発明に係る吸収性物品の実施形態の一例における使い捨ておむつ 10 に関し、発明の不可欠な構成ばかりではなく、選択的及び好ましい構成を含む。図 2 及び図 3 において、後述する各弾性体は、その収縮力に抗して、横方向 X 及び縦方向 Y への収縮力により、各弾性体に取り付けられた部材に生じたギャザーが自然な視覚によっ

て実質的に無くなっているように見える程度にまで伸長された状態にある。

【手続補正 4】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0037

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0037】

また、おむつ10では、前後ウエストパネル14、15を構成する内外層シート17、18、21、22には横方向Xへ延びる複数条の前後ウエスト弾性体20、23が配設されており、製造が容易となるように、横方向Xが内外層シート17、18、21、22の基材となるシートの機械方向MD（不織布製造時のラインの流れ方向）であって、縦方向Yがそれに交差する方向CDとなっている。一方、吸収パネル16においては、縦方向Yへ延びる複数条のレッグ弾性体65が配設されており、製造が容易となるように、縦方向Yがそれを構成する各シート31、34、40の基材となるシートの機械方向MD、横方向Xが交差方向CDとなっている。

【手続補正 5】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0041

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0041】

ここで、柔軟性不織布の「滑らかな、かつ、柔らかくてソフトな触感」は、おむつ10を着用する着用者による触感のほかに、着用者が乳幼児等の場合には、その着用を補助する母親等の着用補助者による触感を含む。特に、着用補助者は、着用を補助する際に、その指先におむつ10の内外面側シートの一部が触れたときの触感によって、そのおむつ10の柔軟性や良好な肌触り性を判断する。具体的には、着用補助者に対して、おむつ10の内外面側シートを形成する柔軟性不織布に触れたときに、指の指紋に繊維がまわり付くような触感を与えることによって、そのおむつ10が柔軟性及び肌触り性に優れたものであると認識させることができる。

【手続補正 6】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0045

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0045】

この種の分野において通常使用される、熱可塑性樹脂による連続繊維不織布は、繊維の自由末端が存在しないことから毛羽立ちがなく平滑性に優れる一方、一般的に風合いが硬く、柔軟性に欠ける。製造時の熱処理条件等の設計を適宜変更することによって多少の改善は可能であるが、十分な柔らかさと滑らかさと通気性とを併せ持つ不織布を得ることはできなかった。本願人は、おむつ10の内外面側シートとして、主としてポリエチレン繊維を用いて、所定範囲の繊維径、KES法による摩擦係数の変動係数を有するспанメルト不織布製の柔軟性不織布を使用することによって、毛羽立ちがなく平滑性に優れ、着用者及び着用補助者に対して、滑らかな、かつ、柔らかくてソフトな触感を与えることを知見した。

【手続補正 7】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0051

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0051】

柔軟性不織布の質量は、J I S L 1 0 9 6 法に基づいて測定した。見掛け密度は、これらの測定によって得られた質量と厚さ寸法とによって算出された平均値（N＝3）から求めた。柔軟性不織布の比容積は、不織布の質量をその厚さで除することによって、算出した。

【手続補正 8】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 7 6

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 0 7 6】

< 通気性（通気抵抗値）の測定 >

まず、各不織布から直径 1 0 0 m m の円形にカットして切り出して試料とした。公知の通気性試験機、例えば、カトーテック （株） 製通気性試験機：K E S－F 8－A P L を使用し、標準通気速度：2 c m／s に設定して試料の通気抵抗値を測定した。かかる測定を 5 回行い、その平均値を各不織布の通気抵抗値とした。通気抵抗値が高いほど通気性が悪いといえる。